報告Ⅳ

僧侶のめざすもの

駒澤大学仏教学部教授
熊本英人

熊本と申します。よろしくお願いいたします。駒澤大学から参りました。駒澤大学のほうからは昨年暮れに石井公成先生がこちらでご報告させていただきまして、それを引き継いでというのはいささか荷が重く、しかも仏教の現代的可能性、特に日本仏教の未来について意見を述べるというようなことで、「日本仏教に未来はあるか」というとても大きなお題に大変困惑しておりますが、その中で、「僧侶のめざすもの」という題でご報告させていただきます。

これまで、ご講演や基調報告がありましたけれども、そもそも仏教の未来、日本の仏教とは何か。あらためて言うまでもないと思いますけれども、すでにお話にもありましたとおり、これが仏陀の真理であるとか、あるいは宗祖の正法であるとかというテーマでは、たぶん今日はないだろうと。事実、曹洞宗の場合で言えば、曹洞宗はそれによって展開してきたわけではないということがはっきりしております。日本仏教はどの宗派も、大なり小なりいわゆる葬式法事であるとか、それから加持祈祷であるとか、そういったもので展開してきたということがあるわけですから、その延長線上の未来ということで考えるならば、やはりいわゆる「教団」の仏教の未来について、「寺院仏教」の未来として、その中で曹洞宗教団の例について少しお話させていただく、というふうに考えています。

つまり「教団仏教」、「寺院仏教」の未来について、特にそこにある危機感というようなものに対して曹洞宗はどう考えているか、対応してきたかということを、近代の曹洞宗の取り組みからみて、少しお話ししたいと思います。

曹洞宗は昭和11年、1936年、それから昭和29年、1954年に大規模な曹洞宗寺院の実態調査を行なっています。その結果として昭和12年に『曹洞宗宗勢要覧―昭和11年度宗勢調査報告』という報告書を出し、それからまた昭和30年、1955年に『昭和30年版曹洞宗の宗勢』という、2冊の本が発行されます。

ちなみにこの最初の調査があった1936年、昭和11年という年は、曹洞宗にとりましては寺族、ご存じの方も多いと思いますけれども、いわゆる僧侶の家族、寺の家族、寺族と呼ばれるものについて、曹洞宗も他の教団に遅れて、ようやく「寺族保護規程」という規程を施行した年で、ですから、調査内容を見てみても、この調査の主眼というものは寺院

の経営の実態、特に寺院の家族の実態という問題にあり、それが大きく取り扱われていました。

このことは昭和11年の報告書の前書きを見ると、「本調査によって、従来机上的甲論乙駁の論議もすべて数のいふ処に従って解消されねばならぬ重要なる文献として評価されねばならぬと信じます。宗門の画期的法制である寺族保護法の如きは、本調査による寺族の関係を一覧することによってのみ、やむを得ざる時代の要求であることが、一層明瞭となり、証明さへしえられるとの感を抱かしめます。この他、寺院経済の動向も、甚だ大まかではあるにいたしましても、これを察知し得るのであります。不十分ながらも寺族関係、寺族経済関係等々が一応まとめあがったことは、今後、宗門の施設や方策を樹立する上の一つと手がかりができたことは確かでありませう。そしてまた本調査は単に調査で終るのではなく。これを基調として諸政策が考へられるときに、初めて本調査の生命は永久的光りをもつものとなるのでありませう」というふうに前書きに書かれているんですね。この調査の意義が説明されているわけです。

しかし、この意義を見て、そしてこの内容を見てみると、結局、この調査が行なわれた理由に、当時においてすでに、まさに「未来はあるか」というような問題というか危機感があったということが分かります。しかしその内容というものは寺院経済であり、そして寺族関係のあり方である。さらにもうひとこと言うなら、いわゆる曹洞宗においての予算をどう使うか。宗費という、曹洞宗ならずとも各宗派同じだと思うのですけれども、曹洞宗が宗派の税金として集めている曹洞宗のお金をどう使うかというような、曹洞宗の政治的な活動の裏付けとして統計を使うという、政治家のやりそうな手段と言えば手段なのですけれども、もちろんそこには切実な、先ほど言ったように曹洞宗の未来に対する危機感があったからこそということになりますけれども、そういうことをすでに昭和11年に行っていたわけです。

そしてそれから約20年たって、そしてまた戦後10年という時点の1954年、昭和29年に新たに戦後の曹洞宗の宗勢調査が行なわれたわけですけれども、調査内容を見ても昭和11年と大きく違うわけではありませんし、前回の調査の延長線上にあると言えます。

ちなみに昭和30年版のやはり前書きを見てみると、「宗勢調査は戦後の社会情勢がわが宗門に及ぼした影響、寺院宗侶寺族の性格の実体、檀信徒の動態等、宗門全般の現況を調査統計、今後の宗門施策の基本資料に供すべく行われたものである。わが宗門は、宗門の現勢に対する統計のみるべきなく、宗政施策は常識的な判断、皮相な見解にゆだねられる場合が多く、その効果を確信することが困難であった」、これは当時の宗務総長が書いているわけですけれども、「これは多年衆務運営に当たってきた私の経験するところであり、統計調査の必要を痛感した所以である」というふうに、昭和11年の成果を踏まえつつと言いながら、新たにゼロからスタートしたような言い方もしているわけです。

そして実はその調査報告書の結びには、もっと厳しいことが書いてあります。これはお

そらく実際に調査の中心となった人が書いたものだと、署名がありませんけれども、思います。相当厳しいことが書かれています。「まず、わが宗門の現勢は相当考慮を要する段階にあるということである。即ち教化機能の沈滞、住職寺族の生活の窮迫、徒弟養成数の逓減、檀信徒の護持力の減退、新興宗教への転信等は著しい数字が現れており、退去の情勢に生きてきた、今後もそのままで生きていこうとする現実がはっきり示されている。寺院の現況、住職の現況、徒弟の現況、寺族の現況、檀信徒の現況と六つの部門に分けて調査したその何れの現況の中にも共通して貫かれている一本の脈管、宗門寺院と宗侶の性格の見逃せないものがある。過去の封建制によって保護され、培われ、伽藍仏教として安住した寺院、宗侶は一つの性格を身につけるに至ったが、現在もなお、その性格から抜けきれないでいる状態がはっきり現れている。このような性格は或は仏教界全般に共通のものであるかもしれないが変革を要望される点である。住職が寺族に縛られている生活、貧乏人の子沢山の寺院が非常に多く、そのために住職の使命が失われているということも認められなければならない」。最後のあたりは、表現としては今は問題があるかもしれませんが、切実な、非常に厳しい現状を訴えている。このような認識が確かにあった。

これは昭和30年、1955年のことです。昭和30年の時点で、すでにこのように厳しい見解が示されているわけです。

そして、それに従って曹洞宗は調査と分析をし続けるということになるわけですけれども、しかし例えばこの厳しい提言が、果たしてその後、生かされているのかどうか。つまり曹洞宗、もっと言えば仏教界全体かもしれませんけれども、おそらく曹洞宗は危機感を、問題点をすでにこの段階からずっとある程度認識し続けてきており、それに基づいて、また調査、検討をし続けてきているわけです。では、これによって問題が解決し、未来が見えてきたのかというと、今お話ししたことでもお分かりのように、昭和11年から劇的に変わったものはおそらくないということになります。

曹洞宗ではその後、「宗勢総合調査」と若干名前も変えて、昭和40年、1965年から新たに10年ごとの調査、検討を今日まで行なっております。2005年、平成17年の調査が2008年に最新のものとして報告されています。

これらの取り組みやこの成果を意味のないものと否定するわけではもちろんありません。また、その成果から、例えば今日の資料に並べたような調査と分析の内容の目次をみるだけでも、そこから教団のかなりの問題点や方向性が分かるわけで、そしてそこには答えも見えてくる。

ちなみにこの調査と直結しているわけではありませんけれども、こうした調査等も踏まえて、曹洞宗総合研究センターが2003年に『葬祭―現代的意義と課題』、それから2008年に『僧侶―その役割と課題』と題した二つの大きな成果を出しています。ある意味、この2冊を読んでいただければ、私が今日申し上げることはもうないと言ってもいいような内容の本ではありますけれども、しかし私の視点とは少し違う、というのが今日のご報告

となるわけです。ちなみに『葬祭』は、1997年の浄土宗の『葬祭仏教―その歴史と現代的課題』を先行業績として、まさに現代的課題がまとめられているもので、「葬式仏教」を日本仏教の現実的な大きなテーマとして取り上げていますけれども、それについては今日は詳しく触れることはいたしません。

いずれにせよ、いま申し上げた流れ、あるいは提示した事実の中で何が分かるかという問題点をいくつか挙げたいと思います。

先の宗勢調査の後を受ける形で出された、昭和34年、1959年の『曹洞宗宗勢白書』、それから1960年の『宗門護持の道』をご覧いただくと、編者は曹洞宗革新政策審議会という大変勇ましい名前の会になっておりますけれども、こういう会を結成して、まさに曹洞宗を革新する。そのための政策を審議する。それこそ曹洞宗の、仏教の未来を見据えた組織がつくられるわけで、これは具体的には、曹洞宗の最高責任者、宗務総長の諮問機関であり、宗門の恒久的興隆発展のために革新策樹立についての必要な事項を調査審議することを目的とするという定義をされた組織になります。

具体的には一仏両祖、これは曹洞宗の言葉ですけれども、一仏、釈尊、釈迦牟尼仏と、両祖、2人の祖師です、大本山永平寺の開山の道元と、大本山總持寺開山の瑩山を両祖として、その一仏両祖の称号に基づき教団を再建し、近代教義の樹立をバックボーンに新しい僧侶の結成を目指すというのが理想であると、当時かかわっておられた桜井秀雄先生はおっしゃっておられます。

今日ではその組織そのものはありません。いつまであったか私も確認しておりませんが、しかしこの方針自体は現在まで続いていて、ですからこの成果の一つが、その名も「曹洞宗現代教学研究会」、現代における教学、教義を研究する。これがのちに、先ほどの本を出した「曹洞宗総合研究センター」となるわけです。ですから曹洞宗を革新するという考え方は、まさに現代に応じた教学、仏教、道元の教え、一仏両祖の教えを樹立する。それをもとに宗教活動を行なうという基本線は、確かにあると言うべきか、どこかにあると言うべきか、このへんは微妙になりますけれども、現在まで続いている。

この曹洞宗革新政策審議会が残した『曹洞宗宗勢白書』と、それから『宗門護持の道』という二つの成果ですが、これは若干裏話になるかもしれませんけれども、『曹洞宗宗勢白書』には「曹洞宗宗勢白書送付についてのお願い」という小さな紙が1枚付されて、各寺院に送付されております。

それに何が書いてあるかというと、「一、此の白書は宗門以外には「部外秘」扱いとご承知願います。二、この白書を出さなければならなかった真意をくみとられ、必ずお読み下さい。三、また宗門発展のための対策について是非ご意見をお寄せ下さい」とあります。つまり、まさに曹洞宗教団が1959年において、相当な危機感を持って、これまでの調査に基づき、これからも革新の道を提示し、そしてそれを内部資料であるけれども、全寺院が読んで、これからを考えよう、ということを、1959年頃、実際に行なっていたわけです。

ですから、曹洞宗だけではないと思いますけれども、曹洞宗の歴史というのは、こうした危機感の積み重ねによって成り立っているというようにも言える。

その後、宗勢総合調査として昭和40年、50年、60年と10年ごとに分析調査が行われました。しかし、その基本線はほぼ変わっていません。さらに言えば昭和11年からそれは変わっていないわけで、もちろん調査項目などを見ると、問題の認識や、あるいは問題点の再確認であるとか、あるいは時代背景などにより変化は見られますけれども、ですからその辺りの変化を詳しく分析していけば、また具体的な問題も出てくる。ただ、それはまた今後の課題としたいと思います。

ちなみに最新の、平成17年と平成7年は比較されて、その間、どういう変化があったかというようなことが曹洞宗総合研究センターの平子泰弘研究員によって報告されています。

さて、いま述べたような調査、分析の繰り返しの中で、それでは先ほどから言っている問題点、気付くこととは何か。これが一つの私の結論になるわけですけれども、はっきりと言ってしまえば、これらの調査の内容や、いま並べた目次項目を見てきて気が付くことの一つは、これらから、曹洞宗の行政の都合、教団の都合、僧侶の都合ということが感じられるということです。

「僧侶のめざすもの」という、一見前向きに聞こえるこの報告のタイトルも、実は、本当のタイトルは「お坊さんの都合」という意味であって、最初、このタイトルにしようかと思ったのですが、さすがに過激すぎるかなと思って、事務局ともご相談の上、「僧侶のめざすもの」としたわけですけれども、どうもこれらはすべてお坊さんの都合を中心で検討されている解釈であり、未来ではないかということです。

もちろん、この調査の中身は何か少し違う、お坊さんの都合だけではないよと言いたげなものも表われているわけで、その一つが曹洞宗教化研修所です。これも実は今の曹洞宗総合研究センターの中に吸収されて、統合されているわけですけれども、その教化研修所の創立20周年記念事業として行われた1975年、昭和50年の『宗教集団の今日と明日』という報告書があります。今を去ることちょうど40年ほど前ですけれども、ここには実は、まさに今日のシンポジウムのようなテーマで、仏教のもつ問題の確認と、それから今後の展望が語られています。

目次をご覧いただけば分かるように、いくつかの宗派の代表が報告をし、さらにそのあとで、前半は研究者同士、それから後半は現場の僧侶同士のこのテーマに関する座談会が行なわれているという、おそらく当時としては画期的な試みが行なわれています。

ここで語られているのは、やはり教団仏教の現実と問題点、社会の現実と仏教の乖離、葛藤が語られているわけです。それはまさに本日、今ここでまた同じようなことが語られている、あるいはこれから語られる。それと同じです。

そしてもう一つ言えるのは、そのあと、1984年、昭和59年ですけれども、曹洞宗宗勢総合調査とは別に行なわれた壇信徒の意識調査があります。その結果と分析が『宗教集団

の明日への課題』と題した報告書で報告されています。これはどちらかというと、宗教学研究者を中心に行なわれた調査であり、分析であるわけです。これも本来、中身をご覧いただいたほうがいいのですが、その一々は紹介できませんので、やはり目次を見ていただくことになりますけれども、この目次を見るだけでも、まさに曹洞宗という教団仏教の現実の部分が浮き彫りにされていることが分かります。

私が先ほど言いたかったことは、その中に例えば井上順孝先生が「曹洞宗からのメッセージはあるか」という章を担当しておられますけれども、その「曹洞宗からのメッセージはあるか」という問いかけ。これがまさに私が言うところの、「お坊さんの都合」という部分とリンクするわけで、それは何かと言うと、井上先生の言うところの「壇信徒のあるべき姿」、これはお坊さんの都合です。都合というか、「檀信徒のあるべき姿」と、それから「壇信徒のありのままの姿」、つまり社会の現実に落差がある。ですから井上先生は、この当たり前の問題を数歩下がって眺望する必要がある、と言い、価値の多元化、時代の変容に惑わされない、一貫した強いメッセージはあるか、と問いかけているわけです。それが「曹洞宗からのメッセージはあるか」という問いかけです。

私がここで言えるのは、その強いメッセージの中身は何かということではなく、まさにそのメッセージなくして壇信徒のあるべき姿を求めている、あるいはさらに、寺族、寺の家族にあるべき姿を求めている。本来あるべき姿というは、僧侶のあるべき姿がまず先にあるはずです。しかし、僧侶のあるべき姿を追求することは置いておいて、自分たちの「今ある姿」が「僧侶の姿」なのだ、という「根拠ない自信」がある。それを前提に寺族や檀信徒にあるべき姿を求めている。宗祖の教えをよく知っているかもしれない。法要儀式をかっこよく行えるかもしれない。そうした根拠のない自信に支えられて、しかし、そこに強いメッセージなどない。

こういったお坊さんの側からの上から目線の提言を、私はお坊さんの都合ではないか？と申し上げているのです。つまり、まずあるべき僧侶の姿、僧侶の意識自体の改革が先ではないか。それで仏教の未来が初めて考えられるのではないか。

ですから、ご紹介した曹洞宗の毎回の膨大な調査と、そしてその成果は非常に貴重なものですが、その貴重なものが生かされるためには、やはり僧侶とは何かという部分がもっと問われる。もちろん質問の中には僧侶とは何かというような質問はあるわけですけれども、質問する側の立場や、あるいは分析の部分が果たして本当に誰からも理解できる、納得できるものであるかどうかが問題だということです。

曹洞宗のこういった議論の中でよく出てくる話があります。現代教学、近代教学と言われるものが目指すものは何かということ、それは、「自信を持って払子を振れる僧侶　「自信を持って葬式を行なえる僧侶」をつくらなければいけない。それで改めてお坊さんの尊敬を復活させるのだ、という言い方です。

もちろん、こういう一面は壇信徒の求めているものと重なるところもあるかもしれませ

んけれども、しかしその言い方はやはりお坊さんの側の都合、お寺の都合、教団の都合、自己満足、根拠のない自信でしかない。家族や寺や教団を背負っているお坊さんの都合でしかない。曹洞宗において、いま見たような調査、あるいはまた貴重な議論の積み重ねを未来に生かすためには、やはりまずそういった部分の意識の変革が必要ではないのか。

もっと厳しいことを言うならば、僧侶であるということは、おそらく自分自身の生きがいや、やりがいすら後回しにしなければいけないはずで、それが大乗仏教ではないか。そうすると生きがいすら後回しにする、それだけの覚悟は果たしてあるのか、その上で自分は僧侶であると言えるのか。

リストの最後に挙げた曹洞宗総合研究センターの『僧侶』には、まさにそういった部分にまで立ち入った分析も確かにあります。しかし、そうではない従前の立場もそこには含まれているわけで、それはたぶん、今日のシンポジウムの中でも同じだと思います。そこからあらためて、お坊さんの都合ではなく僧侶とは何かということが語られる方向が、仏教とは何かが語られるということであり、それがまた仏教の未来へと続く姿であると思います。

ですから繰り返すと、曹洞宗のこれらの活動を批判するというものではなく、むしろこれまでの活動自体は大変評価に値するものである。もちろん私が評価する立場ではありませんけれども、しかし、それが果たしてどのように有効になっているかということ、その意味の伝え方が一面的でしかないということは申し上げたいことです。

それから、僧侶とは何かということで批判的なことを言っておりますけれども、それはまさに私自身が天に唾する行為であり、むしろ私はそれに応えることは何もできないだろう。しかしそれでもあえて言うのは、「根拠のない自信」しか見えてこないということ。そして一方で個々の僧侶を見わたせば、信念や理想や活動において非常に評価されるべき、称賛されるべき影響力を与える僧侶はたくさんいらっしゃるはずです。にもかかわらず未来はあるのかという問いかけが出てくる理由は、やはりそれが仏教として十分に浸透していない、機能していないわけです。

もちろんそこには仏教とは何かという根本的な問いかけもあるでしょうけれども、仏教とは何かも含めて、仏教をいわばリードしていく本来の僧侶、そういうもしかしたら今でもいらっしゃるであろう、そういう僧侶が広がっていくための、例えば曹洞宗なら曹洞宗という教団の取り組みがあるという方向が一つの未来ではないかというふうに私は考えます。

いささか雑駁なお話でしたけれども、以上で報告を終わります。ありがとうございました。

2013/7/20　駒澤大学仏教学部　熊 本 英 人

■「曹洞宗」の取り組みからみえること

1959年『曹洞宗宗勢白書』〔曹洞宗革新政策審議会編、曹洞宗宗務庁刊〕

1960年『宗門護持の道』曹洞宗革新政策審議会編、曹洞宗宗務庁刊

Ⅰ、世界を救うもの
Ⅱ、仏教の現状
Ⅲ、教化活動の実態
　一、宗門の教化活動
　二、寺院における教化活動
　三、寺院における社会事業と社会活動
Ⅳ、宗侶と学業及び教育機関
　一、減少の一途にある徒弟
　二、徒弟の就学状況
Ⅴ、宗門経済の実態
　一、経済は復興しているか
　二、寺院経済の現状
　　(1)不動産の激減
　　(2)動産の価格低下
　　(3)破綻した寺院の経済生活
　　(4)兼務と無住
　三、宗門の経済
　　(1)予算から見た現状
　　(2)宗費の未納の問題
　四、貧困を招いたもの
　　(1)宗門護持の施策
　　ⅰ財団法人曹洞宗檀信徒宗門護持会の実情
　　ⅱ曹洞宗共済組合の実績
　　ⅲ寺院における「檀信徒護持会」の現況
　　(2)宗門経済の前途
むすび

1966年『昭和40年　曹洞宗総合調査報告書』総合企画室編、曹洞宗宗務庁刊

1968年『昭和41年　曹洞宗寺院教化実態調査報告書』服部松斉編、曹洞宗教化研修所刊

1975年『宗教集団の今日と明日』曹洞宗教化研修所創立二十周年記念会編、金華舎刊

第Ⅰ部　論文編

曹洞宗団の今日と明日	桜井秀雄
浄土教団の今日と明日	藤井正雄
神社神道の現状と教化	薗田　稔
カトリック教会の今日と明日	安斎　伸
現代社会と宗教―生き甲斐摸索のリーダー	井門富二夫

第Ⅱ部　座談会編

座談会（一）　宗教集団の今日と明日

出席者　桜井秀雄・藤井正雄・安斎　伸・薗田　稔・井門富二夫、　司会　佐々木宏幹

座談会（二）　現代社会の宗教

出席者　市川智康（日蓮宗）・樟原宏明（浄土真宗本願寺派）・土屋光道（浄土宗）・持地紳行（立正佼正会）・峯岸応哉（曹洞宗）、　司会　佐々木宏幹

解説　佐々木宏幹

1976年『昭和50年　曹洞宗宗勢総合調査報告書』教化部編、曹洞宗宗務庁刊

1984年『宗教集団の明日への課題』曹洞宗宗勢調査委員会編、曹洞宗宗務庁刊

第一部　檀信徒と寺院の諸相

祖先崇拝と仏教　―庄内地方の事例から―　山岡　隆晃

檀信徒の宗教的欲求とその充足　―富山県T市の事例を中心として―　佐藤　憲昭

地域社会における檀信徒の宗教生活　―宮城県七ヶ浜町を事例として―　菅原　壽清

漁業村落における寺院と社会関係　―氷見市宇波の観音寺創立をめぐって―　谷口　貢

宗門檀信徒の帰属意識　長谷部八朗

消費としての宗教　―都市化と宗教意識に関する覚書―　門馬　幸夫

第二部　檀信徒のみたお寺や宗門

一　はじめに　桜井　秀雄

二　教化活動に対する反応（1）　―影響大きい梅花授戒会―　佐藤　憲昭

三　教化活動に対する反応（2）　―変化の激しい海岸部―　菅原　壽清

四　檀信徒の宗教意識の概要（1）　―東北地方にみる祖先崇拝と寺院―　山岡　隆晃

五　檀信徒の宗教意識の概要（2）　―山形県鶴岡市の場合―　渡部　正英

六　檀信徒の宗教意識の概要（3）　―檀信徒にみられる宗門信仰の実態―　伊藤　俊彦

七　寺院の苦悩と檀信徒の悩み　―宮城県南西部の一山村の例―　北小路瑞浩

八　檀信徒の帰属意識　―地域社会の変容に伴う寺院の役割―　長谷部八朗

九　檀信徒のみた住職像　―東北地方の意識調査より―　釈尾　俊光

一〇　寺院と住職に対する檀信徒の意識のちがい　佐藤　憲定

一一　都市寺院への期待と教化の方向性　山田　邦寿

一二　教化活動の可能性を求めて　松田　真道

一三　都市化と宗教意識　門馬　幸夫

一四　檀信徒の宗派意識　―真宗王国のはざまにて―　柚木　祖元

一五　調査はこうやって行われた　井上　正憲

一六　都市化と檀信徒の意識について　菅原　壽清

一七　檀信徒の宗教的欲求と充足　佐藤　憲昭

一八　二十年後のために「坐禅人類学」を　山折　哲雄

一九　宗勢実態（意識）調査に接して　小野　泰博

二〇　「曹洞宗からのメッセージ」はあるか？　井上　順孝

二一　曹洞宗と檀家制度　圭室　文雄

二二　現代仏教教団のディレンマ　田丸　徳善

二三　在家を救う宗門に　洗　建

二四　骨の供養と霊の供養　森岡　清美

二五　おわりに　―調査報告と評価にこたえて―　桜井　秀雄

第三部　資料編

解説　―主要な問題をめぐって―　佐々木宏幹

調査票および集計表

1987年『昭和60年　曹洞宗宗勢総合調査報告書』教化部編、曹洞宗宗務庁刊

1998年『1995(平成7年)　曹洞宗宗勢総合調査報告書』教化部編、曹洞宗宗務庁刊

2003年『葬祭　現代的意義と課題』曹洞宗総合研究センター編・刊

第Ⅰ部　葬祭の意義と課題
序章　仏教と民俗のあいだ
第一節　日本仏教と葬祭の関わり　竹内　弘道
第二節　葬祭と民俗のこころ　大村　英昭
第三節　民俗より宗旨へ　―二十一世紀の課題―　粟谷　良道
第一章　死者とは何か
第一節　民俗からみた死後観
第一項　日本人の霊魂観　山折　哲雄
第二項　死者と来世　佐々木宏幹
第二節　宗典にみえる死後観
第一項　道元禅師の著作にみえる輪廻観　角田　泰隆
第二項　道元禅師の著作にみえる中有観　下室　覚道
第三項　瑩山禅師の著作にみえる死後観　竹内　弘道
第三節　死者の見方
第一項　死者と死体　安田　剛一
第二項　葬祭の対象　松本　皓一
第二章　なぜ葬祭をするのか
第一節　葬祭の意味と機能
第一項　儀礼からみた葬祭の社会的意味　波平恵美子
第二項　葬祭の社会的機能について　佐々木宏幹
第三項　癒しとしての葬祭　奈良　康明
第二節　葬祭における授戒の意義と課題
第一項　授戒の意義と課題　田中　良昭
第二項　没後作僧の意義と課題　椎名　宏雄
第三節　葬祭の宗学的な意味
第一項　はるかなる仏道　角田　泰隆
第二項　共に歩む覚路の荘厳　粟谷　良道
第三項　葬祭と慈悲　―主宰者の立場から―　奈良　康明
第三章　葬祭をめぐる今日的問題
第一節　社会的問題　松本　皓一
第二節　経済問題からの視点　松本　皓一
第Ⅱ部　座談会における問題の摘出と今後の展望
第一章　なぜ葬祭が必要なのか　奈良康明・佐々木宏幹・松本皓一・椎名宏雄・安田剛一
第二章　なぜ僧侶が葬祭に関わるのか　奈良康明・佐々木宏幹・田中良昭・永井政之・松本皓一・角田泰隆
第三章　葬祭をめぐる今後の課題　奈良康明・松田文雄・佐々木宏幹・田中良昭・永井政之・菅原壽清
第Ⅲ部　資料編
第一章　アンケート調査の紹介　菅原　壽清
第二章　アンケート調査結果の解説　菅原　壽清

2008年『2005(平成17年)　曹洞宗宗勢総合調査報告書』教化部編、曹洞宗宗務庁刊

2008年『僧侶　その役割と課題』曹洞宗総合研究センター編・刊

第1部　現代における僧侶の問題点
第一章　僧侶の現状と問題点　椎名　宏雄

第二章　在家者からみた僧侶の問題点
第一節　檀信徒や現場に聴くことから　青木　利夫
第二節　若者への意識調査に基づく僧侶のイメージ　井上　順孝
第三節　檀信徒の意見からみた僧侶の問題点　粟谷　良道
第三章　情報化社会と僧侶　竹内　弘道
第２部　求められる僧侶像
序章　求められる僧侶像の構成要件　佐々木宏幹
第一章　人びとから帰依される僧侶　―聖性―
第一節　出家者としての僧侶　―現代出家性の構築―　奈良　康明
第二節　持戒者としての僧侶　―現代仏教倫理の構築―　永井　政之
第三節　信仰者としての僧侶　丸子　孝法
第二章　坐禅と教義を説ける僧侶　―思想性―
第一節　坐禅を実践する僧侶　盛田　正孝
第二節　教義を語り布教する僧侶　和田　善明
第三章　儀礼主宰者としての僧侶　―儀礼性―
第一節　僧侶と儀礼　永井　政之
第二節　葬祭儀礼　吉田　道興
第三節　祈祷儀礼　佐藤　俊晃
第四章　人びとと共に生きる僧侶　―民俗性―
第一節　民俗と仏教の間で　―民俗から宗旨へ―　粟谷　良道
第二節　「死後世界」のイメージ　佐々木宏幹
第五章　現代社会に生きる僧侶　―社会性―
第一節　日本社会の特質と僧侶の課題　安田　剛一
第二節　同悲同苦の活動　奈良　康明
第三節　釈尊と社会　金子　宗元
第四節　僧侶と社会　―ターミナルケア―　平子　泰弘
第五節　僧侶と社会　―ボランティア―　秋　央文
第３部　僧侶の歴史的変容と課題
第一章　両祖の仏道
第一節　道元禅師における学道の用心　角田　泰隆
第二節　瑩山禅師の仏道　―激動の時代を生きた禅僧―　竹内　弘道
第二章　僧侶の歴史的変容
第一節　中世における変容　宮地　清彦
第二節　近世における変容　圭室　文雄
第三節　近代における変容　宮地　清彦
第四節　現代に生さる僧侶とその課題　田中　良昭
第三章　求められる僧侶の養成
第一節　僧侶養成の現状と課題　椎名　宏雄
第二節　僧侶養成の可能性　小池　孝範
第４部　座談会
第一章　現代僧侶の問題点　田中良昭・永井政之・竹内弘道・佐々木宏幹・椎名宏雄
第二章　求められる僧侶像　田中良昭・奈良康明・永井政之・佐々木宏幹・佐藤俊晃・安川剛一・粟谷良道
第三章　僧侶の歴史的変容と課題　永井政之・佐々木宏幹・椎名宏雄・圭室文雄・粟谷良道
付論　外国における僧侶の現状
第一章　ミャンマー仏教の僧侶　古山　健一
第二章　チベット仏教の僧侶　下室　覚道